

「後期近代社会が健康づくりやスポーツ文化に もたらす影響」研究経過報告

奥 田 睦 子

要 旨

現代社会は、健康の維持増進への価値や競技スポーツを中心とする近代スポーツの形を生み出した前期近代社会に続く後期近代社会であるとも言われている。したがって、後期近代社会である現代社会における健康づくりやスポーツ文化の創造は、近代社会の遺産を引き継ぎながらなされていくことになる。

一方、後期近代社会である現代社会は前期近代とは異なり高齢化が進行し、また、1994年に行われた「(第1回)世界女性スポーツ会議」では、スポーツのあらゆる分野での女性の参加を求めた「ブライトン宣言」が採択されている。さらに、2006年には国連で障害者の権利に関する条約(Convention on the Rights of Persons with Disabilities)が採択され、後期近代社会では、前期近代社会では端に追いやられてきた高齢者や女性、障害者等も含めた社会が形成されつつある。健康づくりやスポーツ文化は、社会変化と共にその形は変容するものである。そこで本研究では、このような後期近代社会における健康づくりやスポーツ文化の望ましい変容の姿を考察するにあたり、その前段階として前期近代社会と後期近代社会の特徴を念頭に置きながら、高齢者の健康づくりの課題を明らかにすること、および、障害者の理解を促進することを目的として行われている健常者の障害者スポーツ体験がもたらす障害者理解の背景に関する考察を行った。

キーワード：後期近代社会、健康づくり、スポーツ文化、高齢者、障害者

1. 研究概要

本研究では、近代社会と後期近代社会の特徴を念頭に置きながら、高齢者の健康づくりの課題を明らかにすること、および、障害者の理解を促進することを目的として行われている健常者の障害者スポーツ体験がもたらす障害者理解の背景に関する考察を行った。それぞれの研究概要は、以下の通りである。

(1) 高齢者の健康づくりの課題の観点から

本研究では、本来、個人の自由意志にもとづく運動・スポーツの実施が、疾病予防や健康増進、介護予防の手段の一つとして社会的な関心事として位置づいていることを、なぜ当たり前にか(善

しとするのか)ということについて、その条件について考察を行った。以下、考察内容である。

近代社会とは、「科学革命」「産業革命」「市民革命」の3つの大きな革命によって登場した社会である。「科学革命」によって、知識は宗教から離れて客観的で普遍的なものという考え方が変わり、物事を論理的に考えそれを実験や観察によって確かめるという方法で得られた知識こそが、正しい知識であるという考え方に変わった。また、「科学革命」による科学的知識の発展が機械技術に応用されることで、モノの生産方法や経済のしくみが変わる「産業革命」がおり、社会の隅々まで合理化や効率化が徹底されるようになった。さらに、「市民革命」によって社会を統治する政治の仕組みについて、王が統治する絶対王政ではなく民衆自らが社会を統制する民主主義に転換した。なかでも、「科学革命」による自然に関する知識は、原因－結果にもとづく機械的、合理的な法則にもとづいて獲得されるものであることから、自然は神の意志によって動かされているではなく、原因－結果のメカニズムによって自動的に動いているのであると考えるようになり、その結果、人間が自然を支配できると考えるようになっていったのである。また、論理的な思考様式は「こうだから（原因）こうなる（結果）」という原因－結果の関係に基づくため、結果と原因を入れ替えて「こうなるため（結果・目的）にはこうすればよい（手段）」という、目的－手段の知識が容易に導かれる（古川 2018：28-94）。このような社会を、われわれは生きているのである。

人が老いるということは自然であるがゆえに、人間が支配する対象とならざるを得ない。また、より合理的で効率的であることが求められる社会において、合理的で効率的なことに貢献しづらくなる老いは、できるだけ食い止められるべきものとして捉えられざるをえない。アンチエイジングや若返り、ピンピンコロリという言葉は、それを象徴しているといえよう。運動不足によって（原因）、健康の悪化や要介護状態が生じる（結果）というメカニズムが明らかとなり、それならば健康増進や介護予防のため（結果・目的）に合理的、効率的な方法で運動・スポーツを行って体を動かす機会を増やしましょう（手段）と専門家からいわれると、われわれはそれを当たり前のこととして受け入れてしまうのではないだろうか、と考察された。

（2）健常者の障害者スポーツ体験がもたらす障害者理解の背景に関する観点から

近年、健常者が障害者と共に障害者スポーツを体験する機会が多く設けられている。そこには、健常者のスポーツを通じた障害者の理解が期待されている。実際の成果として、障害へのポジティブな応答が見られることが複数報告されている。一方、障害者の疑似体験に関する研究では、障害者が感じている困りごと、むずかしいこと、できないことに目が行き過ぎてしまうことで、障害者へのネガティブな態度を植えつける可能性があることが報告されている。障害者スポーツ体験にも障害者の疑似体験が含まれている考慮をすると、なぜ障害へのポジティブな応答が見られるのか、その背景について考察することが必要であると考えられる。本研究ではこのような問題意識に基づき、健常者の障害者スポーツ体験がもたらす障害者理解の背景について考察することを目的としておこなった。

障害者の疑似体験に関する先行研究によれば、体験は人々の間のコミュニケーションを通じて協働

的に構成されると考える社会構成主義の観点から捉えることが必要であり、また、障害の疑似体験は障害当事者と協働してある事柄を障害(ディスアビリティ)して意味付ける過程に参加することによって可能になると言われている。そこで、本研究ではこのことを踏まえ、健常者の障害者スポーツ体験における障害当事者との協働過程に着目し、その過程を分析することを試みた。その結果、健常者の障害者スポーツ体験がもたらす障害者理解の背景について、以下の3つのことがあるのではないかと考察された。

3つとはすなわち、①身体機能の拡大や縮小による「健常者と障害者の身体機能の逆転」、②スポーツの文化的特徴である非日常である遊びを基軸にした「『できない』を楽しむスポーツの非日常の経験」、③身体に着目した「他者性を内包する『開かれた身体』の獲得」である。これらの3つは、それぞれ独立して存在しているわけではない。なぜなら、①で健常者が前向きに身体機能を縮小させることと、③で健常者の身体が他者(障害者)に開かれることは、ともに日常の社会生活のあり方が崩される中で生起されるものであり、それを可能にしているものとして、②の障害者スポーツが非日常としての遊びの性質を包含しているからである。健常者による障害者スポーツ体験として行われることの多い車いすバスケットボールを例に、①から③をあてはめてみると、①健常者は、車いすにのることで下半身の機能が縮小され、シュートで健常者である自分はゴールに届かないけれども、障害者のプレイヤーは届く場合など逆転現象が生じる。このことによって、障害に対して「できない」という否定的な要素が消し去られポジティブな応答への変容が見られる。その背景には、②健常者と障害者との間において遊びという非日常が媒介することで、日常生活の延長として障害を理解しなければならないといったまじめで常識的な構えが崩される。それゆえ、③身体が他者(障害者)に対して開かれ、ポジティブな応答が可能になったのではないかと考察された。

2. 成果の発表には至っていないが着手している研究

運動不足によって(原因)、健康の悪化や要介護状態が生じる(結果)というメカニズムが明らかとなり、それならば健康増進や介護予防のため(結果・目的)に合理的、効率的な方法で運動・スポーツを行って体を動かす機会を増やすこと(手段)を当たり前を受けとめてしまうことについて、問題があるのではないか思われた。社会学者のUlrich Beckは、後期近代社会について再帰的近代という言葉を使い、近代化を徹底して行うことで、意図せざる結果として自己破壊や自己危害が生じる新たな時代に突入していると述べている(Ulrich Beck, Anthony Giddens & Scott Lash 1994: 邦訳1997: 9 - 103)。Beckの言葉を踏まえると、長寿を望むことは否定されるべきことではないが、人が老いる存在であるという自然現象に対してそれを認めない近代化の徹底につながる運動・スポーツは、意図せざる結果としてかえって高齢者の生きづらさを助長するものになる可能性があるのではないかと考えられたからである。したがって、自発的で自由に行う運動・スポーツと、健康増進や介護予防のため(結果・目的)に合理的、効率的な方法で体を動かす(手段)となる運動・スポーツの二項対立をどのように乗り越えていくのか、その方向性を探る必要性があるのではないかと考えた。

そこで、このことを探る方法として、ドイツでは障害者や高齢者が地域の市民型スポーツクラブ（以下、市民型クラブ）で、医療保険制度を活用してリハビリテーションスポーツを行うことができる制度を有していることから、自治や自由を重んずる市民型クラブの理念と医療の補完的位置づけとしてのスポーツとの二項対立をどのように乗り越えているのか、この点について詳細を明らかにしたらよいのではないかと着想した。特に、現代社会においては高齢化の進展に伴い認知症の人が増加していることから、認知症の人の市民型クラブにおけるリハビリテーションスポーツの参加の現状を明らかにすることを試みた。

2019年11月に訪独し、ドイツ障害者スポーツ連盟を介して、ドルトムント大学がノルトラインヴェストファーレン州障害者リハビリテーションスポーツ連盟と連携し、2014年～2016年に実施した、認知症の人の市民型スポーツクラブへの参加を推進する『認知症の人のためのスポーツプロジェクト期間：2014-2016 科学的モニタリングの最終報告』（SPORT FÜR MENSCHEN MIT DEMENZ Projektlaufzeit: 2014 – 2016 Abschlussbericht der wissenschaftlichen Begleitung）を入手した。この報告書は、全117頁で6章から構成されている。第4章に、認知症の人の市民型クラブへの参加について提供者側であるクラブの課題とチャンスが、また、第5章に参加者からみたクラブの課題等が記されており、現在、内容把握を行っているところである。また、実際に市民型クラブと病院（Sana Kinken Duisburg）が連携して行っている認知症患者向けのスポーツ教室の運営責任者のHoler Silkorski氏から、教室を始めた経緯や運営上の理念等を聞くことができた。運営上の理念として、スポーツは自由で自発的なものであることから、認知症があってもこのことが重要であると常に意識していると明確に述べていた。

日本において、高齢化の進展に伴って認知症を発症する人も増加する中、今後の高齢者のスポーツ環境を考える上で、認知症の人の運動・スポーツの参加の可能性についても視野に入れる必要があるのではないか。その際、認知症の人の運動・スポーツについて、人に着目すれば運動・スポーツは自発的で自由に行うという文化的側面が重視され、認知症という病気に着目すれば、感情や心理的効果がどのくらい見込めるか等の医療的側面が重視されることになるだろう。過度な医療的側面の重視は先述のとおり、運動・スポーツを手段ととらえ、結果・目的に合わせていかに合理的、効率的な方法で体を動かす機会を増やすのかということのを推し進めることになる。すなわち、このような近代化の徹底につながる運動・スポーツは、意図せざる結果としてかえって高齢者の生きづらさを助長するものになる可能性があると考えられる。文化的側面と医療的側面の二項対立を乗り越える方向性について、入手した報告書の翻訳を進め、その内容を手掛かりとして考察を進めている途中である。

3. 発表した研究成果

（著書・論文）

奥田陸子, 2019, 「近代化と長寿社会」, 田島良輝・神野賢治編著『スポーツの「あたりまえ」を疑え!』晃洋書房, pp.157 - 159.

奥田睦子, 2019, 「パラリンピックとスペシャルオリンピックス」, 井上俊・菊幸一編著『改訂版 よくわかるスポーツ文化論』, ミネルヴァ書房, pp.180 - 181.

奥田睦子, 2020, 「健常者の障害者スポーツ体験に関する研究視角の検討 ―障害に対するポジティブな応答はなぜ生まれるのか―」, 京都産業大学論集社会科学系列 37: 1 - 11.

(学会発表)

奥田睦子, 2019, 「健常者の障害者スポーツ体験がもたらす障害者理解の背景 ―障害の疑似体験との相違に着目して―」, 日本アダプテッド体育・スポーツ学会第 24 回大会 (大阪体育大学, 2019 年 12 月).

(その他)

奥田睦子, 2020, 「健常者の障害者スポーツ体験がもたらす障害者理解の背景に関する一考察」, 日本スポーツ社会学会第 29 回大会 (秋田大学, 2019 年 3 月, 新型コロナウイルスの感染拡大予防のため開催中止), 発表抄録 62-63 ページ.

引用・参考文献

古川雄嗣, 2018, 『大人の道徳 西洋近代思想を問い直す』 東洋経済新聞社.

Ulrich, Beck, Anthony, Giddens, & Scott, Lash., 1994, *Reflexive Modernization - Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order* -, UK by Polity Press (松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化』而立書房 1997 年).

Research progress report : The Influence of Post-Modern Society on Health Promotion and Sports Culture

Mutsuko OKUDA

Abstract

Our present society is said to be a Post-modern society. This follows on from modern society, from which both the modern concept of sports, focusing on competitive sports, and the recognition of the value of promoting and improving health are derived. Therefore, we have inherited this legacy of modern society as we form concepts of health promotion and sports culture for the Post-modern society in which we now live.

Unlike early-modern society, our present Post-modern society is rapidly aging. At the First World Conference on Women and Sport in 1994, the “Brighton Declaration” called for women’s participation in all areas of sports, while in 2006, the United Nations adopted the Convention on the Rights of Persons with Disabilities. Thus, the Post-modern society we are shaping includes groups who have been marginalized in modern society: the elderly, females, and people with disabilities. Health promotion and sports culture will be transformed with these social changes.

In this study, as a first step toward considering what kind of transformation is desirable in terms of health promotion and sports culture in late modern society, we identify the issue of health promotion for the elderly and discuss the perception of people with disabilities through the experience of able-bodied people participating in disability sports, while keeping in mind the characteristics of modern society and Post-modern society.

Keywords : Post-modern society, Health Promotion, Sports Culture, Elderly, People with disabilities